

---

# 大好きな父へ...

鈴夜 音猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大好きな父へ…

### 【Nコード】

N3671C

### 【作者名】

鈴夜 音猫

### 【あらすじ】

『自分の存在が父を苦しめている…』そう感じた時、いたいけな少女はある一つの事を望んだ…娘は父の為、何を想ったのか？そんな健気な少女のお話。

『時間』がない事は、ずっと前から知っていた

何の為に生きているのか分からなかった。唯、寝て起きてぼうつとする毎日。はつきり言つて、生きている意味などない気がした。

「お前は母さんが命をかけて産んだ大切な子だよ」

そう言つて頭を撫でる父の目には、何時も決まつて微笑みと同時に涙が浮かぶ。私は、父の大好きだった母の命と引き換えに生まれてきた。今でも、いや、今だからこそ思う。何故、死んだのが私ではなかったのかと。

そして何時からか、私は死を望む様になっていた。

「もう、来年は迎えられないでしょう…」

そう医師が語るのを聞いたのは、ある秋の頃。気晴らしにと廊下をぶらぶらしていた時だった。

少しだけ開いたドアを閉めようと近づいた時、医師の押し殺した声を聞いた。

誰の事かと除いてみると、医師と向かい合う様に座る人影が目に入った。草臥れたスーツ、そして刈りあげた後ろ髪。それはまさしく父の後ろ姿だった。

「それは、あの子が…雪菜が死ぬという事ですか？」

「…あくまで、可能性ですが」

医師の答えに私は静かにその場を離れた。ようやくこの時が来たのだと、私は嬉しくなる。

これで、もう父を苦しめる存在がいなくなる。

「やっと死ねる…」

小さな声で何度も呟く。『死』という単語を繰り返す事で、だんだんと実感が湧いてくる。

病室に戻り、私は笑った。まるで頭のおかしな人になったかのように、私は笑い続けていた。

その時が訪れたのは、その年の冬。息が白く染まる程寒い日だった。

意外と早く訪れた最期に、父はベッドの傍らで泣いていた。私は力の入らない手を何とか動かし、父の手を掴んだ。

ゴツゴツと骨の浮き上がった手を握り、私は微笑んで見せた。もっとも、顔の筋肉が正常に働いていたならばの話だが。

「雪菜…すまん」

哀しげに父は顔を歪めた。私は父と繋いだ手に力を込める。視界がだんだんと霞んでいた。

「もう、良いよ…パパ」

良く見えない視界の中で、父が目を見開いているのが分かった。私は徐々に薄れゆく意識の中で、大好きな父がこれからを自分の為に生きてくれる事を願った。

狭い病室の個室に、男の押し殺した泣き声がやけにうるさかった。それと時を同じくして、二人がもう共に生きれない事を報せるかの様に、長く続く心電図の音が響いていた。

（後書き）

こんにちは。ここまで読んで下さり、ありがとうございます。今回は、父と娘（主に娘のみですが）のお話です。父的には娘に生きていて欲しいけれど、苦しんでいる姿は見たくないから、最期は静かに逝かせた。という所です。娘は娘で、母を死なせたて自分を責め、父を自由にさせようと『死』を選ぶ。ちよつと哀しいお話ですが、如何でしたでしょうか？またご意見、ご感想お待ちしております。次回もよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3671c/>

---

大好きな父へ...

2010年10月17日01時50分発行